

論文内容の要約

論文題目：中国語を母語とする日本語学習者によるオノマトペの習得

氏名：馮 亜静

本博士論文では、言語学と心理学の枠組みで第2言語としての日本語オノマトペの習得を検討した。意味・統語論的観点から、中国語を母語とする日本語学習者（以下、日本語学習者）を対象として、第1言語（L1）と対照しながら第2言語（L2）としての日本語オノマトペの意味習得プロセスと統語習得プロセスを明らかにした。

第1章では、①意味拡張（「擬音語から擬態語へ」および「触覚から触覚以外へ」の意味拡張）によるオノマトペの意味習得の連続性、②擬音語と擬態語の習得における影響要因、③オノマトペの軽動詞付加（以下、スル動詞）と副詞の品詞転換習得、④擬情語動詞文の身体心理名詞句の付加有無、の4つについて検討することを概観した。

第2章では、L1とL2における日本語オノマトペの習得に関する実証的先行研究、および非日本語母語話者による日本語オノマトペの音象徴への感覚評価に関する実証的先行研究について検討した。L1では、幼児期から音象徴の感覚を身につけ、周りの言語環境からのオノマトペのインプットにより、オノマトペを一般語彙よりも容易に習得しているとされている（Imai et al., 2008; 佐治他, 2011 など）。日本語オノマトペの意味習得プロセスにおいては、「擬音語>擬態語>擬情語」という「語彙的類像性階層」にしたがって、語彙的類像性の高い擬音語から擬態語へ、さらに語彙的類像性の低い擬情語への順序で日本語オノマトペを獲得していく（Akita, 2009）と考えられる。また、スル動詞から副詞への品詞転換現象が起こっていると説明される（佐治・今井, 2013; 鈴木, 2013 など）。さらに、日本語学習経験のない非日本語母語話者も日本語オノマトペの音象徴的特徴の一部分を普遍的に捉え（Iwasaki et al., 2007; 荒田他, 2010 など）、擬態語よりも擬音語の音象徴を捉えやすい（Iwasaki et al., 2007; 栄, 2011）と言われている。

第3章では、辞書、コーパスに基づいて共感覚比喻の視点から擬音語の準擬態語化と完全擬態語化について考察した。擬音・擬態両用のオノマトペにおける聴覚の感覚転用パターンを総括し、さらに「聴覚>視覚>触覚>動静感覚>気分感覚>次元感覚>味覚\leftrightarrow嗅覚」という「感覚転用の傾向」仮説を提起した。また、五感内の感覚転用は、聴覚から触覚への感覚転用パターンが最も多いため、触覚が擬音語の完全擬態語化プロセスには重要な知覚機能を担っていると考えられる。さらに、触覚を介して他の感覚が味覚へ転用されるため、触覚は味覚と他の感覚の間には橋渡しのような機能を担っていると考えられる。なお、五感領域から五感以外の領域への感覚転用には、触覚は共感覚として最も次元感覚、動静感覚、気分感覚を修飾しやすい傾向がある。この調査結果に基づいて、以下の調査研究のための刺激語を選定した。

第4章では、擬音・擬態両用のオノマトペの12語を刺激語とし、141名の日本語学習者に擬音・擬態両用のオノマトペの意味理解課題を課し、日本語学習者が日本語母語話者のように「擬音語から擬態語へ」の意味拡張により日本語オノマトペを連続的順序で習得しているかどうかを検討した。

その結果、擬音語のほうが擬態語よりもより良く習得されていた。そのため、オノマトペの習得に関する先行研究に基づいて、一般の語彙知識（オノマトペ以外の語彙知識）から擬音語と擬態語の習得の因果関係について3つのモデルを設定した。モデル1は、語彙知識から擬音語へ、そして「擬音語から擬態語へ」という直列的な因果関係習得モデルであった。モデル2は語彙知識から擬音語および擬態語へと別々に習得されるとする並列的な因果関係モデルであった。モデル3は語彙知識から擬音語と擬態語がそれぞれ独立して並列に習得され、同時に「擬音語から擬態語へ」という意味拡張による直列的な習得の流れも起こるとするモデルである。そして、構造方程式モデリング（SEM）により擬音語と擬態語の3つの習得因果関係の解析を行った。その結果、モデル2は最適であった。これにより、「擬音語から擬態語へ」という習得の直列的な因果関係はなく、語彙知識が擬音語と擬態語の習得に別々に寄与していることがわかった。このようにして、日本語学習者がオノマトペの擬音的意味と擬態的意味を連続的に習得していないことを実証した。

第5章では、触覚の多義オノマトペの8語を刺激語として、141名の日本語学習者に触覚オノマトペの意味理解課題を行い、日本語学習者が「触覚から触覚以外へ」の意味拡張、すなわち「具象的な意味から抽象的な意味へ」の意味拡張により日本語オノマトペを連続的に習得しているかどうかを検討した。その結果、やはりより具象的な意味を持つ触覚オノマトペのほうが抽象的な意味を持つ触覚以外のオノマトペよりもより良く習得されていた。さらに、「触覚から触覚以外へ」の意味拡張により多義オノマトペを習得しているかどうかを検討するために、一般の語彙知識から触覚オノマトペと触覚以外のオノマトペの習得について3つの因果関係モデルを設定した。モデル1は語彙知識から触覚オノマトペへ、さらに「触覚から触覚以外へ」という直列因果関係モデルを想定した。モデル2は語彙知識から触覚オノマトペと触覚以外のオノマトペが独立して習得されるとする並列因果関係モデルである。モデル3は、「触覚から触覚以外へ」という直列的な因果関係に、語彙知識から触覚オノマトペと触覚以外のオノマトペが別々に習得されるとする並列的な因果関係を加えて、混合因果関係とした。SEMによる因果関係の解析結果、モデル2が最適であることが示された。したがって、日本語学習者は、同一のオノマトペの具象的な意味と抽象的な意味を別々に習得していると考えられる。

第6章では、日本語の語彙知識と日中オノマトペの音韻類似性という2つの要因に焦点を絞って擬音語と擬態語の習得を考察した。12語の擬音・擬態両用のオノマトペの擬音語の使用条件で、日本語学習者27名に言語連想実験を実施し、12語の刺激語に対応する中国語の擬音語を選定した。さらに、異なる日本語学習者35名に音韻類似性の実験を実施し、7段階のリッカート尺度により日中両言語の擬音語の音韻類似性の度合いを数値化し、12語の擬音語を「高類似性」「中類似性」「低類似性」「超低類似性」の4グループに分けた。そして、日本語学習者141名を対象に擬音・擬態両用のオノマトペの意味理解課題を課した。同時に、語彙テストで語彙知識を測定した。語彙テストの得点分布にしたがって、141名の日本語学習者を語彙力別に「上位群」「中位群」「下位群」に分けた。さらに、回帰木分析で、L2の日本語の擬音語と擬態語の習得に語彙力と日中両言語の音韻類似性がどのように影響するかを検討した。その結果、擬音語の習得では、音韻類似性が最も強い予測要因となった。音韻類似性の高い擬音語のほうが日本語学習者に理解されやすかった。次の要因

として、語彙力の影響がみられた。語彙力の高いほうがより良く擬音語を習得していた。これにより、L2の擬音語の習得には母語の中国語の正の転移による促進効果がみられた。一方、擬態語の習得では、語彙力が最も強い要因となった。特に、語彙知識の少ない中位群・下位群は擬態語の正答率が低かった。

第7章では、語彙的類像性の異なる3タイプ（擬音語、擬態語、擬情語）のオノマトペの各10語、合計30語を刺激語として、同一オノマトペ（同義）のスル動詞としての使用と副詞としての使用の2条件で、日本語学習者88名に擬音語、擬態語、擬情語の意味理解課題を課し、オノマトペの品詞転換がL2の習得にもみられるかどうかを検討した。また、オノマトペの種類による語彙的類像性の効果について追認した。文法テストも同時に実施し、オノマトペの品詞習得への影響を検討した。その結果、全体的にみると、副詞としての使用のほうがスル動詞としての使用よりも得点が有意に高かった。同一のオノマトペの、副詞としての使用とスル動詞としての使用の習得は同じではなかった。スル動詞から副詞への品詞転換による習得という連続性はみいだせなかった。擬音語と擬態語の品詞習得では、副詞としての使用のほうがスル動詞としての使用よりも良く習得された。さらに、「擬音語>擬態語>擬情語」の順でオノマトペの副詞としての使用がよりよく習得されていた。つまり、L2のオノマトペの習得には語彙的類像性の効果がみられた。

第8章では、名詞句（NP）付加（Class #1）、NP付加・NP不要（Class #2）、NP不要（Class #3）の3タイプの擬情語動詞の各6語（合計18語）を刺激語として、日本語母語話者76名と日本語学習者88名にNP付加の判断課題を課し、異なる文法形式を有する擬情語動詞にNPの標識を正しく付加できるかどうかを検討した。日本語学習者には、文法テストも実施した。その結果、日本語母語話者はオノマトペのNP付加ルール（Akita, 2010）にしたがって3タイプの擬情語動詞にNPを適切に付加した。しかし、日本語学習者はNP無標の擬情語動詞文よりもNP有標の擬情語動詞文にNPを正しく付加した。また、擬情語動詞へのNP付加において、過剰一般化が観察された。分類分析の結果、Class #1の擬情語動詞は、文法力の高低に関わらず身体に関わるNPを正しく付加していた。Class #3のNP付加は、文法力の高い上位群しかNP付加を抑制できなかった。これにより、日本語学習者は豊かな文法知識を身につけてから、NP標識を持たない擬情語動詞文を無標化させることができるようになることがわかった。

最後に、第9章では研究結果全体について議論した。まず、擬音・擬態両用のオノマトペ、または触覚の多義オノマトペの基本義と拡張義の習得には連続的な習得順序がなかった。多義オノマトペの語義を個別に習得した結果、同一のオノマトペのそれぞれの意味が意味ネットワークの形式ではなく、分散的にメンタル・レキシコンに記録されていると予想される。また、SEMによる因果関係についての解析結果では、語彙知識とオノマトペの習得には有意な因果関係がみられた。語彙知識の増加とともに、オノマトペの知識も蓄積されてくることが示唆された。多義オノマトペの意味ネットワークの形成は日本語語彙知識に依存すると考えられる。また、日本語学習者の擬音語と擬態語の習得に影響する主要因が異なることから、音象徴への感受性によりオノマトペを感覚的に習得する可能性は低く、むしろ一般語彙のように習得していると考えられ、「一般語彙としての日本語オノマトペの習得」という仮説（針生・趙, 2007; 飯田他, 2012; 馮・玉岡, 20018a）を支持した。さ

らに、擬音・擬態両用のオノマトペ、触覚の多義オノマトペの基本義と拡張義の習得には、いずれも具象性の高い基本義が具象性の低い拡張義よりも習得されやすいことがわかった。また、日本語母語話者は、オノマトペの統語習得プロセスはスル動詞から副詞へと品詞転換しているのに対して、日本語学習者はこうした品詞転換過程が存在しないようである。さらに、日本語学習者は、擬情語動詞文のNP付加ルールを適用していなかった。本研究では、以上のように、日本語学習者のオノマトペの習得は、日本語母語話者とは大きく異なっていることを実証し、それらを詳細に解明した。